

9月16日(土) 小講演第1室(723)

2 ウェブスター辞典の系譜

菅原光穂(岐阜女子大学)

【要旨】

A passel of double-domes at the G. & C. Merriam Company joint in Springfield, Mass., have been confabbing and yakking for twenty seven years -- which is not intended to infer that they have not been doing plenty work -- and now they have finalized Webster's Third New International Dictionary, Unabridged, a new edition of that swell and esteemed word book. これは1961年10月12日付けのニューヨーク・タイムズ紙の論説の冒頭の部分であるが、耳慣れない語句で読者を驚かせておいて、論説は「どうしてこのような語句が標準用法であるのか不思議でならない。」という。更に、「大学や大学院へ進学する若者達が自国語をろくに使えず、的確なコミュニケーションも満足にできないという状況に対して憤懣やるかたない人々が巷に溢れていることをどお思うのであろうか。... the publication of a say-as-you-go dictionary can only accelerate the deterioration.」だとする。

これは New International の第2版に慣れ親しんだ人々の Third New International への違和感を表わすものだけでなく、記述主義に対する当時の社会的背景をよく示している例でもある。

1828年にノア・ウェブスターが出版した American Dictionary においてもそうである。辞書というものは、当時、財政的にも労力においても、個人による多大な犠牲のもとに作成されていたことを思えば、辞書作成には、作成者の政治的、社会的、教育的あるいは学問的に強固な信念がなければならない。辞書の誕生と出版の継続は、そうした個人の信念とそれを受け入れる社会の思惑との拮抗の上に成り立つ。

19世紀の初めから20世紀の後半にかけて、アメリカではウェブスターと名のつく多くの辞書が出版されてきた。それぞれには出版の諸事情があつてそうなのであろうが、その事情を垣間見る一つの方法として、ここでは、ウェブスターの直系ともいわれる、American Dictionary, International Dictionary, New International Dictionary, 及び A Dictionary of the English Language の殆どすべての版についてその出版年を整理・配列し、それらの戸籍調べを行なってみたい。

【対象辞書名(その略称)】

An American Dictionary of the English Language (AD)

A Dictionary of the English Language (DEL)

Webster's International Dictionary of the English Language (ID)

9月16日(土) 小講演第1室(7 2 3)

Webster's New International Dictionary of the English Language (NID)

Webster's New International Dictionary of the English Language, 2nd ed.
(NID2)

Webster's Third New International Dictionary of the English Language
(3NID)